気狂いピエロ

須藤ハヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
気狂いピエロ

【Ｎコード】
Ｎ４４１４Ｙ

【作者名】
須藤ハヤ

【あらすじ】
女性捜査官ベルカは幼児連続殺人事件の捜査を行っていた。狂気に満ちた殺人鬼を追い、女は着実に闇へと足を踏み入れていく。なぜ、殺人鬼は狂気を露にし命を奪うのか、ベルカは知らない。追う事で自身が飲み込まれていく事を。
狂気に勝つことは、できるのか。

【この小説は以前別の場所で書いておりましたが、規制の為に移動してまいりました。ご了承ください】

一章：血抜きの魔（1）（前書き）

この小説には、緊迫した心理状況と空気感を演出する為に、出血や肉体破壊などが多々描かれます。尚、支柱には幼児連続殺人がありますので、苦手な方はよくご確認の上ご視聴いただけますと幸いです。

一章：血抜きの魔（1）

―プロローグ―

嘗て、こんな話しを聞いた事はないだろうか。

―【悪い事をしたら、気狂いピエロがやってきて、体中の血を抜かれるよ】

母親達が、悪戯をした子供に使う作り話だ。よく耳にするだろう、子供を大人しくさせる為に、怪獣やお化けを作り話にして子供に吹き込む初歩的な子供騙しを。本来なら、只の作り話で終る。

だが……。もし――それが本当に現れたら？

体中の血を全て抜かれ、身体をバラバラに切り刻まれて、野良犬の餌にされたら？

いや、その身体の一部を切り取られ、誰かに移植されたら？

食べられたら？

―どうする？

貴方の愛する子供が……ピエロの楽しい喜劇の主人公にされたら……。

抱き締めなさい。その愛する子供の頭を。抱いて逃げなさい、その幼い赤ん坊の身体を。

ピエロは笑う。悲しいピエロは、喜劇を舞う。残酷な暗闇の夜に、真紅の涙を流して、ピエロは美しき死体の女王と、一夜を明かす。

そして、夜がくると、ピエロはまた……狩りを始める。狙うは、美しき女の、青い瞳を掲げる目玉。

一章：血抜きの魔（2）

朝。いつもの様に朝刊に目を通し、片手に持ったブラックコーヒーを啜ると、女性捜査官ベルカは深く溜息をついた。
また、載っている。血塗れの小児遺体と、まくしたてる記者達の文字。どこから入手するのか分からない程鮮明で生々しい写真に、市民達は興奮し恐怖を感じる。そして、忘れる。今この街で何が起きているのかも考えずに一日を凄し、また明日がくる。――その繰り返し。

「はぁ……一体どこから手に入れてんのよ。こんな遺体をまくしたてて、何が楽しいの。人間のくず共が」
記者達に対する敵意を、言葉に出して並べてみる。が、新聞に載っている記者の顔は、憎たらしい程の満面の笑みだ。更に苛々するだけで何の解決にもならない。
ベルカはぼさぼさの茶髪を掻き上げ、眉間に皺を寄せながらコーヒーを啜る。早朝五時、外は薄暗く、空気はまだ澄んでいる。開け放っている窓から若干肌寒い風が吹き込んでくるが、気にしない。季節は、秋だ、もうすぐ冬がくる。外の温度を考えて、黒のコートを出した。職場に着ていくことが若干嫌なのだが、仕方がない。仕事が捜査なだけに、薄着で秋の都会を歩く事はできないのだ。特に今は。
裏路地や、スラムを巡回する事の方が多い。薄着で歩く事、肌の露出は避けなければ、痛い目をみる。現に、此間同行させた新米捜査官は肌の露出があった為にホームレスに声を掛けられ、痴漢をされた。そして、すぐにこの捜査を降り、今は別の捜査にあたっている。まぁ、その捜査官の様に女らしい顔立ちと、格好をしている訳でもないベルカは、おそらくそんな事はないだろう。普段から、男と間違えられる程の男顔なのだから。

最後の一口となったコーヒーを飲み干し、黒のジーンズを履き、黒のコートを羽織り、黒のブーツを履いて、古めかしい築７０年のアパートを後にする。道端には沢山の落ち葉が舞い、踏みしめる度に脆い音が響いた。秋の風に乗って人々の匂いが微かに鼻孔に入ってくるのを感じながら、空を見上げて歩いた。曇っている。今日は、雪だろう。

捜査が難しそうだ、と思いながら、コートのポケットに両手を突っ込み、肩を縮めて職場を目指す。誰もいない道端は、予想以上に、静かだった。

――廊下にブーツの低いヒールがテンポの良い音を響かせる。

「ベルカ！　有力な情報だ！」

「おはよう。ジェシー」

「え、ああ、おはよう。って、挨拶は後だ！　昨日の殺人現場の近くで、またあのピエロが目撃されてたぞ！」

部署に入るなり、同僚であり同じ捜査官のジェシーが叫びながら駆け寄ってきた。ベルカはそれを尻目に「あ、コール。コーヒーちょうだい、いつもの濃いブラック」と丁度コーヒーを入れていた部署に手伝いで来ている新米刑事の青年に頼んで、そそくさと自分のデスクに向かった。そして、席に座り、置いてある書類に目を通す。

書いてあるのは、現在捜査中の殺人ピエロの事だ。今朝、朝刊に載っていた小児遺体も、この殺人ピエロがやったとされている。これで殺人ピエロの猟奇的殺人は１５件目。殺人ピエロが狙うのは幼い少年少女ばかり。沢山の刑事、捜査官が頭を抱えるこの殺人鬼に、ベルカもまた頭を悩ませていた。眉間に皺を寄せて考えていると不意に、肩を強い力で掴まれた。

「ベルカ！　俺の話しを聞けよ！」
ジェシーだ。余程さっき無視した事が効いたのか、若干怒っている。普段あまり怒らない暢気な性格のジェシーが眉毛を吊り上げているのを見たのは、いつ振りだったか。
「ああ、はいはい。また目撃情報でしょ、どうせデマよ」
「そんなの調べてみなきゃ分かんないだろ」
「分かるわよ。どうせまた、話しを聞かせる代わりに金をよこせって言うに決まってる」
「……」
黙り込んでしまった。まぁ、当然だろう、いつもの事だ。ジェシーが持ってくる情報は大抵の事が嘘。その度に金をよこせと言われて、損をする。これが、この事件の捜査がまったく進まない大きな理由だ。
新聞や雑誌で殺人ピエロの事が載せられる度、金目当てで嘘の情報を流す市民が増えた。嘘の情報を流す者が増えた事で、一番信憑性のある情報が埋もれて捜査が進まない。とんでもない悪循環だ。
重苦しい沈黙が暫く流れた。
空気が思い。

「あの……」
重苦しい空気を打破したのは、コールだった。右手にコーヒーの入ったマグカップを持ち、心配そうな表情のままこちらを見据えて、恐る恐る声を掛けたのだ。
「ありがとう。其処においてくれる」
「はい」
「はぁ……ごめん。みっともないでしょ、こんな事」
「いえ……」
マグカップを置き、よそよそしく離れるコールに、短い謝罪をベルカは述べた。仕方がないのだ。ジェシーもベルカも、姿の見えない殺人鬼に苛々し、当てもない捜査に嫌気がさしてきている。その

せいで、普段暢気なジェシーですら苛立ちを隠せず、口論になってしまう。
ベルカは眉間に皺を寄せ、目を通していた書類を机に投げた。そして、「はぁ……もう。いつになったら分かるのよ、いかれ野郎の正体は」と、両手で髪を掻き上げ、心からの叫びを、口にした。そして、近くに置いておいたコートを鷲掴みにすると、勢いよく立ち上がり

「行くわよ、ジェシー」
驚いた顔をするジェシーの目が視界に入る。
「行くって、何処に？」
「捜査よ。ここでぐだぐだしてても何も変わらない」
「目撃情報を捜すのか？」
「そうよ」
コーヒーを一口啜り、急ぎ足でその場を後にしようとする、コールと目が合った。一瞬、奇妙な心境になったが、気にせずに歩みを進め、部署を出る。ジェシーもその後を追い、外に出るや、止めておいた車へと乗り込んだ。その表情は、笑みだった。

一章：血抜きの魔（3）

車の助手席に座るや、ベルカは手に持っていたコートを後部座席に放り投げた。そして、慣れた手つきで前方のダッシュボードを開き、シート型のガムを取り出す。味はチェリー。ジェシーお気に入りのフレーバーで、この車に乗る時は必ず噛む物だ。
一枚口に含んで一息つくと、運転席に乗り込んだジェーシーの苦笑交じりな問い掛けが耳に入ってきた。聞いただけで、ジェーシーの顔が想像できる程、感情の籠った声。

「ベルカ、お前って、本当に気分屋だよな」
「どこが？」
「さっきまでデマとか言ってたくせに、今はこうして捜査に出てる」

「……。考えたのよ。こうして時間を潰してる間に、また一人、いかれ野郎に殺される子供がいたらって……」
「……」
「何で黙るの？」
「いや……確かにそうだなと思ってさ。今日も、出るかな。死体……」
「……さぁね」
ジェシーはエンジンを駆けた。不意に、その指元に目をやる。真新しい指輪が、はめられていた。だるそうに助手席に深く座り、流れていく外の景色を眺めながら、話しの種を探してみるが。やはり――この事しか思い浮かばなかった。
「ねぇ、ジェシー。プロポーズしたのね、彼女に」
ジェシーの彼女。名前はルイーナ・カッセル。小柄で大人しい性

格の歯科助手。栗色の巻き毛と澄んだ青い瞳が印象的な可愛らしい女性だった。前に一度、ジェシーの紹介で夕食を共にし、その幼い見た目に驚愕した事を覚えている。
ジェシーの歳は２６歳。彼女は、２２歳だったはずだ。ふと思う。
――なんでこんな事を考えてる？
「ああ。昨日な。オッケーしてくれたよ」
「そう、良かったじゃない」
「どうした？　急に」
「何でもない。只、指輪が目にはいっただけよ」
ジェーシーとは7年の付き合いになる。ベルカは現在２６歳。捜査官になった時期もまったく同じで、同い年という事もあってよく酒を飲んだりした。だが、ジェシーに女ができていらい、一緒に酒を飲む回数は着実に減り、今では一ヶ月に一度が良いくらいだ。思えば、ジェシーとは捜査仲間で、そういった感情を抱いた事は一度もなかった。いうなれば、ベルカは生粋の仕事好き。男よりも仕事を取る。そんな女。
「ベルカ、お前は、男作らないのか？」
「なんで？」
「なんとなく」
「男なんて嫌いよ。私より弱い」
「っはは。お前が強すぎるんだよ」
「ふん……」。鼻で笑い、ベルカは深く座りなおして、目を閉じ、「寝るから、着いたら起こして」と短く口にすると、すぐさま深い眠りへと落ちていった。ベルカがこんな風に人前でだらしなくできるのは、ジェシー以外、いないのだ。

「お疲れさん。相棒」

殺人現場、スラム第２１に到着した。このスラムは、通称「ジャングル」と呼ばれる不法地帯で、人が殆ど寄りつかない。つまり、殺

しをするには最適の場所だ。
昨日まで死体の置かれていた場所には血の跡が残り、腐敗臭が漂っている。目を背けようと空を見上げているジェシーと相反して、ベルカは死体の置いてあった場所にしゃがみ、小さく十字をきると、空を見上げているジェシーの袖を引っ張って、近くにあるアパートに視線を向けた。人がいる場所は、あそこぐらいしかない。
分かれて聴取をするには二人共同意見で即決だった。確かに、二人で分かれた方が早い。ただし――。

「ジェシー、いい。くれぐれも弱みを見せない事、つけこまれるから」
「分かってる。何年やってると思ってんだ？」
「分かってるなら良いけど。あ、あと一つ。殺されそうになったら、撃ちなさい」
「なっ、何言ってんだベルカ、それは」
「ここはジャングル。簡単に、殺される」
「……」

そう。ここは無法地帯。暴力、恐喝、強盗、何でもあり。警察ですら見捨てた土地。殺人鬼は其処を選んだ。今までも、そうだった。
人の寄りつかない場所に、子供の遺体を置いて行く。しかも、どの遺体もどれも悲惨な程滅茶苦茶にされ、血を全て抜かれたあげく、必ず眼球を右目だけ抜いて。まるで、母親が言う気狂いピエロみたいだと一人の刑事が口にし。それ以来、この事件の犯人は――気狂いピエロ。と呼ばれる様になった。
ベルカも幼い頃、よく母に言われた事を覚えている。気狂いピエロは全身の血を抜く悪魔だと。幼い頃はそれが怖くて仕方がなかった。
この殺人鬼が、ピエロの格好をしているのかは定かではないが、目撃者がこぞってピエロだと言うので、捜査ではピエロを捜している。

当てもない人物を探す事の嫌気がさすのも、分かるだろう。
分かれて暫くたった。だが、情報は無し。また眉間に皺が寄る「また……スカ」
ジェシーと合流する為に上の階に向かう。

途端に――パンッ！
高い銃声が耳を貫く。そして……。「待て！」っと、ジェシーの叫び声が階段中にこだました。

「あいつがくる！　あいつが殺しにくる！　逃げないと！　逃げないと殺される！」

絶え絶えの息使いで、男の声が階段中に響き、階段を勢いよく駆け下りてくるのも分かる。ベルカは常備していた小型の拳銃を構え、男が姿を現すのを待った。
銃を構え、身構えた瞬間。
パンッ！――二発目の銃声が耳を貫いた。
男が、転がり落ちてくる。そして、背中を壁に打ち付け、止まると、その視線は、ベルカの視線とぶつかった。男は右足を撃ち抜かれ、銃創から止めどなく赤黒い血を流しながら、必死で立ちあがろうとして、左足を、ベルカに撃ち抜かれた。
しかし、男は苦痛の表情も浮かべず、一言「お前だ。あいつはお前を求めてる、もううすぐ食われる」と、意味の分からない言葉を並べ、不敵に笑うと「ひゃはははは！」と狂ったように笑い出し
「私が食われる？　馬鹿な事言わないで。それに、あいつって誰なの。答えなさい」
「食われる！　お前はあいつの人形の一部になるんだ！」
「余計な事は言わないで！　あいつって誰なの！」

こめかみに銃口を突き付け、脅してみるが、男は口を割らず、一行として不敵に笑うばかりだった。まるでベルカの表情を楽しんでいるかのように表情を伺い、そして最後は
――舌を噛んで自害した。
ジェシーが降りてきて、その光景を目の当たりにするや、「あいつって、誰なんだ……」と、小さく呟いた。どうやら階段を降りながら話しが聞こえていたようだ。
あいつという言葉に呆然としているベルカの背中にそっと手を置いて、次の行動を促す。男の情報を調べる為に財布などを取り出し、中に入ってる免許証でもカードでも情報になる物は全て調べる。が、この男は何も持っていなかった。
肩を落とし、頭を悩ませながら車に戻った二人は、どちらからともなく溜息を吐き。そして。

「私を狙ってるんですって。馬鹿らしい」
「心配するなよ。俺がいる」
「期待はしないわ。自分の身は自分で守る」
「……はいはい」

姿の見えない殺人鬼。そして、男が口にしたあいつ。もしかすると同じ奴かもしれない。だが何故、男は逃げだそうとし、自害したのか。また一つ、調べなければならない事が増えた。
不意に、流れていく景色に目を向けてみる。廃墟に近い建物が過ぎていく。鼻に残った男の血の臭いが嫌で、眉間に皺を寄せながら、広い公園の中心を見据えてみると、笑いながら遊ぶ子供達の中心に、大道芸人であろう、風船と飴の入った籠を持った。
赤鼻のピエロが、不気味な作り物の笑顔を浮かべていた。

二章：死体人形（1）

真夜中。時は１２時。辺りは街灯も何もなく、道を照らす明かりすらない裏路地で、其処に住み着いたドブネズミだけが、
――幼い少女の悲鳴を聞いた。
辺りに漂う、肉の焼ける臭いと、幼い少女の悲痛な叫び。そして、
「ははは……ほら、綺麗に切れたよ。今度は左手の指にしようか」
不気味に紡がれる殺人ピエロの生温い言葉。少女の悲鳴が冷たい大気を揺らし、ぬるぬるとした真紅の鮮血は下水道へと流れていく。麻酔も掛けずに切断される痛みを想像した事があるだろうか。それも幼い少女が、その指を焼き鏝で焼き切られる痛みを。ピエロは笑い、行動を続ける。次は左手の指に手を伸ばし、刃渡り１５？のナイフで、一気に切り落とそうとした。満足げな笑みを浮かべて囁く。

「君は今日……悪い事をしたんだ」
「ううっ……嫌ぁぁ！」
第二関節から人差し指が地面に落ちる。
「嫌ぁぁぁ！　痛い！　ママぁぁぁ！」
「君のママはもういないよ。君が悪い事をしたから、君は僕に売られたんだ。だから、叫んでも来ないよ」

第一関節から小指が地面に落ちる。そして、「君は天国には行けない。だって、君は悪い子だから。全身の血を捧げて、悪魔に食われるんだ」少女の首が宙を舞う。綺麗なブロンドだった髪を鮮血で赤く染めて、その白く美しい肌は青白く硬くなっていく。ピエロは少女の身体を二本のロープで電柱に吊るし上げて、両足を切断した。返り血を浴びて赤く染まった白塗りのピエロの顔は、月明かりで不

気味に光る。野良犬ですら恐れをなすその顔に、今日もまた不気味な笑みを浮かべて、気狂いピエロが夜の闇に紛れて走り去っていく。両手に、少女の両足を持って。

「ははは……待っててね、ラドール。これから食べさせてあげるから」

朝。目覚めの悪い朝を迎えたベルカの横にはジェシーが居た。あの日以来、ベルカの部屋に侵入者が相次いだのだ。もちろん上司命令で。それでベルカを守るべく、付き合いの長いジェシーが暫く護衛する事になった。そして、まるまる一晩、ジェシーは寝る事無く傍にいて、朝になると

「おはよう……ジェシー」

「おはよう、ベルカ。朝飯、食うか？」

朝食を作ってベルカを起こしにくるのだった。まるで主夫かと言いたくなる程の朝食を作り。味も悪くなく。コーヒーも丁度いい濃さで入れている。本当に、良い主夫ぶりだ。

朝食を断り、脱衣所に向かうと顔を洗い、寝癖を直し、歯を磨いて、服を着替えると、コーヒーを啜って朝刊に目を通す。家に一人男がいてもたいして変わらないものだと思いながら、いつもの朝の日課を行う。開け放たれた窓から吹き込んでくる風は、既に冬の風だ。そして、朝刊に目を通しながら眉間に皺が寄るのも、男がいても変わらない。

またしても、死体が出た。幼い少女の死体。名前は、ルナ・ハイルベーカー。富豪の一人娘で、歳は１０歳。母親と父親は仕事で海外に行っていた。幼い少女は父親の実家に預けられていたようだが、二日前から行方が分からなくなっていたらしい。何故、実家の母親が探さなかったのかについては、こう書いてあった。

「あの子は、沢山の友達がいるので無断で泊ったのかと思った」

と。なんと子供に無関心なのだろうか。ベルカは苛立ちを募らせながら朝刊を投げ捨てた。これだから子供が殺されるのだと、眉間に深い皺を寄せて、投げ捨てた朝刊の遺体写真を見据える。

「気づいたか？　ベルカ」

向かいの席で朝食を取っていたジェシーがパンを齧りながら問う。

「特徴が無くなったわね……ここ最近の死体」

「ああ。殺しの特徴もなくなった。前までは血を抜いてバラバラに切り刻んでたのに、ここ最近はバラバラにして身体の一部を持ち逃げするようになってる。目玉も残してな」

よく、物を食べながらそんな事が言えるな。ベルカはコーヒーを啜りながら不思議そうな顔をした。とうの相手は対して気にしていないようだが

朝食を済ませ、職場に向かう車内。突然、空気が重くなった。理由は、ジェシーの彼女からのメール。

――私よりその人が大事？

この一言だけの文章に、とんでもない威圧感を感じて、ジェシーは一度彼女に電話を掛けたが……。彼女は出なかった。言い表せない罪悪感を胸に無言の車内で外を見るのは息が詰まる。しかし、書ける言葉は、見つからない。

元はと言えば、いくら上司命令と言えど一週間も女の家にジェシーはいるのだ。婚約相手が黙っている筈がない。ジェシーは、優し過ぎた。一人の女よりも、全てに優しく接する為に問題を招くのはしばしば、その度に彼女と喧嘩して、和解してはまた問題が起きる。今回は、これだ。

家に侵入者があったからと、男女が一つ屋根の下で一週間共にいる。どう考えても、結婚の約束をしている男がする事ではない。なんと、

言葉を掛けたらいいのだろうか。
「……ジェシー」
「……ん？」
「これからどうするの……彼女。私、巻き込まれるの嫌よ」
「うーん……今日の夜、夕飯に誘う。それで謝るさ。許してくれるだろ」
　署に着いた。ベルカは逃げる様に素早く車を降り、速足で部署に向かい、また、コールにコーヒを頼むと、コートを脱いで席に座った。「はぁ……これだから男は」一人呟く、すると。

「男がどうかしたんですか？」
　コールの声が後ろから響き、そっとコーヒーが差し出された。妙に早い。コーヒーを頼んだのはさっきだ。驚いて、コーヒーとコールを見比べていると、目の前の若い青年は、満足そうに笑って
「いつも、ベルカさんはこの時間に来て、コーヒーを頼みます。だから、先に入れておきました」
　青年は、不思議な程、純粋な瞳をしてこちらを見据えてくる。思わず、目を逸らしてしまった。突如「お前ら何見つめ合ってんだよ」と、ジェシーのからかいが飛んでくる。助かった……内心思ってしまう。「あ、すみません。お邪魔しました」と、コールは一例して去っていく。
その後ろ姿を、何とも言えない心境で、目で追ってしまった。
　コールは、２０歳でここに来て、二年ここの手伝いをしている。現在は２２歳。ベルカとは４歳違う、まだまだ子供な青年だ。さっぱりとした茶髪のショートヘアーに、すらりと高い身長。簡単に言えば、平凡な青年。性格は大人しいが優しく、気がきく。ジェシーとは真逆の優しさ――甘い？
なんというのだろうか、この心境は。ジェシーには言えない、言えば、「それは恋だ！」と、笑われるに違いない。しかし、こんな感情からずっと逃げてきたベルカには、もはや聞ける相手はジェシー

ししか、いないのだ。

「ジェシー、ちょっと良い？……」

話しかけようとした瞬間。

――ジェシー捜査官に小包です！　署に届いた荷物を配りに来る総務の女性が、元気よく声を張った。

呼ばれた本人は「はいはい。何かなー」と、楽しそうに席を立ち、いそいそと受け取りに向かう。タイミングを、完全に逃してしまった。

小包を受け取った、ジェーシーが後ろを通り、席に戻る。

「ん？……今。何か嫌な臭いが……」

一瞬。嗅いだ事のある臭いが鼻孔に飛び込み、脳を刺激した。先月から嗅ぎ続けている、人間が焼けた臭いと、強烈な腐敗臭だ。いや、そんなはずがない。小包の中に、そんな物が入っている筈がない。

だが、何故臭いが。気になり、手早く小包を開けるジェシーの手元を見据える。妙に、胸騒ぎがする。

「さて、何が来たんだ？　送り主は……ルイーナか。態々小包で、うーん。まさかな……」

「……」

箱が開く。

予感が、当たった。

二章：死体人形（2）

想像した事があるだろうか。受け取った小包に、第一関節から切断された女性の指。そして、見覚えのある指輪。ジェシーは言葉を失った。デスクに置いた小包の中身を漠然と見据え、投げる事も、動く事もできない。

その指と指輪に見覚えがあった。一週間前――プロポーズした彼女に渡した、婚約指輪。

みるみる内に青ざめていく婚約者の背中は、以上な程小さく、そして誰も寄せ付けない欠乏感を漂わせていた。長身のジェシーの背中が、あんなに小さく見えたのは、これが初めてだった。

そんなジェシーの異変に気付いた同僚が、箱を覗き込んだ瞬間「な、なんだこりゃ！　指だ！　人の指だ！」当然の様に、どよめきが起き、騒ぎ立てる人々から孤立していくジェシーの方に、ベルカは冷静な言葉を紡いだ。

「ジェシー。手紙が入ってるわ」

箱の中にはピンク色の封筒が一枚入っている。ピエロのシールが貼られた、いかにもふざけた風貌の封筒。

「……」

乱暴に封を切り、内容を確かめるジェシー。

「畜生！　殺す！　殺してやる！」

目を充血させ、酸欠状態にも見える程、目に絶望を滲ませて叫ぶ。怒りに身を任せて手紙を破り捨てようとしたジェシーの手を制し、ベルカも内様を確かめる。一瞬だが、人々のどよめきが、止まった。

内容は、こんなものだった。

【親愛なる邪魔者のお二人へ。プレゼントは喜んでいただけましたか？　僕の邪魔をすると、こうなるんですよ。メール、本物と間違えて焦ったでしょ。君は、まだまだ僕の目的を知らないはずだ。
　僕は、気狂いピエロ。君達は僕の崇拝者を死なせたから、また一人、君達の大切な人を貰う。これからも楽しい喜劇をプレゼントするから、楽しみにしててね。あ、婚約者さん。君のフィアンセ、綺麗に切れたよ。今度は、胴体と頭を送るから、待っててねー】

　馬鹿にしている。文体を見て分かる通り。心の底から、怒りを誘う、極めて馬鹿にした手紙。湧きあがる怒りを抑えきれず、勢いよく手紙を握りしめると、ゴミ箱に放り込んだ。この犯人だけは、なんとしても、捕まえて極刑にしなくてはならない。
先程送られてきたメールも、全てピエロが送ってきた物。その時既に、ルイーナは……殺されていた。

夜が、当然の様にやってきた。
　辺りは深い闇に包まれ、街灯の明かりには無数の蛾が群がり舞う。降り積もった雪が足を掴み、なかなか進まない。マフラーに埋めた顔が、身を切る様な風で痛い。いつもと変わらない、冬の夜だ。
だが、一つ違う事がある。ここ一週間、ずっと隣を歩いていたジェシーの姿が、無い。その代わりに、今隣を歩いているのは、コールだった。

「ごめんなさいね……。送らせて……」
「いえ、気にしないでください。俺なら大丈夫ですから」
「……ありがとう」
　コールは優しく微笑み、静かに前方に広がる闇を見据える。冷たく、何もかもを呑み込んでしまいそうな巨大な闇。まるで、大きく口を開ける殺人ピエロの狂気の様にも見えた。
「ジェシーさん……大丈夫でしょうか」

「……大丈夫よ。あいつは、以外に強いから」
「ですよね。あの人は強い人だ。きっと、犯人を捕まえてくれます」
「捕まえるだけで済めば良いんだけど……。きっと、殺すわよ、あいつ」
「あ……。俺も、多分、大切な人を殺されたら……そうするかもしれません」
「……」

今日、ジェシーはベルカの家に行かないと宣言するや、そそくさと署を後にして、その後の消息はつかめていない。そして、ジェシーの代わりに護衛を任されたのが、コールだった。
初め、ベルカはそれを拒んだが、上司命令で断り切れず、今に至っている。目指しているのは、ベルカのアパートだ。

築70年のアパートは、冬の夜風に晒されて、到るところから、痛々しい叫びが響いた。赤煉瓦が組まれただけのシンプルで力強い外見とは違い
中は木材でできた、いかにも古めかしい内装だ。階段を上がれば、一段昇るごとに脆い音が鳴り、一部屋一部屋の扉には、無数の傷があった。ベルカの部屋は、アパートの三階、一番端にある。
一番人気がなく、唯一空いていた部屋だった。

「ここで良いわ」
ジェシーの話しをして以降。無言で歩き続けた結果、予定よりも早く部屋に到着した。重苦しい空気が二人の周りを包み、そして締め付ける。薄暗いアパート内は小さな明かりが付いているだけで実に不気味だ。
ベルカは自室の前でコールに向き直り。そう口にすると、部屋の鍵を開けて返事を待たずに入ろうとした。一刻も早く、一人になりた

かった。同僚の婚約者が殺されたと知って冷静に振る舞うのはかなり辛かったのだ。いくらクールに振る舞っていようと、女は女。心は、そんなに強くは無い。
「大丈夫ですか？　一人は危ないんじゃ」
「良いから。帰って」

限界だった。もう、隠せない。
乱暴に扉を閉め、鍵を掛ける。
コールは、どんな顔をしていただろう。まだまだ若い青年の、困り果てた表情を想像してみた。みるみる内に、あの優しい顔が沈んでいく。電気も点けづに、玄関の前でへたり込んだ。暗闇の中、窓の外を舞う真っ白な雪だけがくっきりと浮かんで見える。
外は、吹雪になっていた。大丈夫だろうか。歩いて、帰る事ができるだろうか。思わず心配になった。確か、コールの家はここから２０キロ先。この時間、電車は無い。今から走れば、間に合う。ベルカの心に、言い表せない程の後悔が、広がっていった。なんと、大人げないのだろう。
慌てて立ち上がり、鍵を開けようと手を掛けた。

――駄・目・だ・よ

背後から、不気味な含み笑いで言葉が紡がれる。そして、勢いよく口を手で抑えられ。右手を空いている手で掴まれた。銃が抜けない。いや――恐怖で身体が動かない。
異常な程冷たい手が、口から首筋へとずらされ、指先で撫でる。口から手が離されているのに、声も出ない。これが、恐怖。殺される人間が何もできないのを、ベルカは、初めて知った。恐る恐る、ドアの横に掛けられている鏡を横目で見据えてみる。
そこには、自身の後ろで不気味に笑う、青白い顔をした、ピエロが確かにいた。

二章：死体人形（3）

このままでは、殺されてしまう。他の被害者の様に、血を抜かれ、切り刻まれ、身体の一部を持っていかれる。いや、もっと酷いかもしれない。なんせ、自身はピエロを捜し、邪魔をした、言わば敵。あの手紙の通り
邪魔者と思っているなら、まず殺される事は逃れられない。足掻かなければ。抵抗しなければ。脂汗が額に滲む。ピエロとベルカの息遣いだけが部屋中に響き、体温が上昇するのを感じた。その瞬間、身体の感覚が戻ってくる。動かなければ、只その一心で、背後にいる殺人鬼の爪先をブーツのヒールで踏みつけ、同時に肘打ちを放った。
運良く肘打ちは相手の胸内に入り、怯ませ引き剥がす事に成功。腰に装備した拳銃を構え、殺意にも似た闘志を瞳に宿し睨みつける。

「答えろ、お前は何者だ。名前と年齢を答えろ」
落ち着いて聴取できている。だが、緊張の余り額に滲む汗は止まらない。頬を伝い、首筋を流れる。しかし、銃口を向けられている本人はというと。依然として作られた満面の笑みだった。銃口を向けながら右手で明りを点け、相手の顔を見据えてみれば
その顔に絶句してしまう。ピエロは、１８歳ぐらいの子供だったのだ。終いにはおどけたポーズをし始める始末。赤と白の顔、ブカブカの縦じまパンツ、無駄に大きな靴、三つ分けになった帽子。王道なピエロが、さも楽しそうに首を傾げ、質問に答える気など一切無いと舌を出した。
――　一発。右足の脛を貫通。

「答えろ！　お前は何者だ！　子供だからって容赦はしない、素直に答えろ！」

一気に形勢が逆転。足を撃ち抜かれたピエロ、いや、少年は硬く冷たいフローリングに止めどなく血を流しながら倒れ込んだ。顔に描かれた偽物の笑顔が苦痛で歪み、その瞳はベルカの瞳に捉えられたまま逃れる事は無い。
少年は、撃たれるとは思っていなかったのだろう。まだ若い自分を、女の捜査官が撃つ筈がない。そう高を括っていたのかもしれない。それが、甘い考えだった。ベルカの心には、もはや慈悲と呼べる感情は一切ない。あるのは、怒りと憎しみだけだ。その気になれば射殺する事も躊躇はしない。それだけ、気狂いピエロは罪を重ねたのだ。
ベルカは、依然として質問に答えない少年に再度銃口を向ける。狙っているのは、左足の脛だ。引き金に指を掛けた。その瞬間。少年は、自白を始める。心が、恐怖に負けた。

「撃つな！　頼む、撃たないで！」
表情が脅えている。
「答えれば撃たないわ。名前を言いなさい」
銃口は下げない。これぐらいの恐怖では、この少年が今まで与えてきた恐怖とは比較できない程、軽すぎる。
「クリスチャン・グロッサ！　僕の名前はクリスチャン・グロッサです！」
「年齢は」
「１８です！　お願いですから、もう何もしませんから！　銃を向けないでください！」

何故だろう。この少年からは、全く狂気を感じない。それどころから、哀れに見える。これが、本当にあの殺人鬼なのか。２０人の少年少女を殺し、バラバラにした凶悪な人物が、銃口を向けられて脅えている
本心なのか。いや、演技の可能性もある。

「アンタ、本当に気狂いピエロなの？」
思わず聞いてしまった。すると、思わぬ言葉が、帰ってきた。想像もしていなかった。絶望の返答が。
「僕は気狂いピエロです！　でも……僕は人を殺していません！　あいつがやったんです！　あいつが！」
【汚れ血よ……森帰れ……。闇を掘る……辿り着く断頭台……。真紅の血に抱かれ寝むれば良い……
聖母マリアの膝の上……翼を持たぬ天使は首を抱く……。気狂いピエロの心には……愛すべき女神が……抱かれている】

捉えられた少年は永遠とこの言葉を繰り返した。心が折れたのか、少年は自身の目玉を抉り出して、暫く「あいつ」と呼ばれる者の事を叫び続けた。少年の両親から、ベルカは、お前のせいで息子が壊れたと怒声を浴びせられ、上司に，無期限の停職を言い渡され、今はコールの家で書類を読んでいる。
あの後。色々あったのだ。
銃口を向けられ続けた少年は「あいつ」と叫んだ後に微動だにしなくなり。かと思えば連行する為に呼んだパトカーの中で、目玉を抉り出した。隣に座っていたベルカは少年の血を服に浴びながらも抑えつけ、結局その格好を上司に見られ停職処分を言い渡された。
電話を受け駆け込んできたコールは必死で頭を下げる始末。ベルカは、心の底から疲労を感じた。こんな事は、初めてだ。

「コール……もう謝らなくて良いから。私は大丈夫。ジェシーは来てないの？」
気になっていた事を、項垂れて落ち込んでいるコールに聞いた。ジェーシーの姿が無い。
「ああ。そう言えばいませんね。電話はしたらしいですが」

青年は項垂れたまま答え。頭を掻きながら、顔を上げた。その顔は、依然として悔しそうだ。

「エレン。ジェシーは？　電話したんでしょ」

「したわよ。でも……出ないの。さっきからずっとかけてるんだけど」

ジェシーの消息が掴めない。ベルカの心に、嫌な苦みが広がる。コールは、ベルカのそんな表情を、逃さなかった。

――こういう時、惨劇は、続くものだ。

※　二時間後。同期の捜査官、ジェシー・グレイハワードは死体で発見された。

背中に大きく、【３６ドール】と彫られ、屈強だった腕は両腕切断されて腹の上で組まれて置いてあり。茶髪を真紅に染めら、眼球を両方とも抜き取られ発見されなかった。ジェシーの遺体の傍には、またあのふざけた封筒が置いてあり

内容を聞いたベルカは、悲鳴を上げるともつかない声で嗚咽を漏らして泣きじゃくった。その隣で、只見据える事しかできない新米刑事の青年は、何を思っただろう。目の前で、自身が守ると決めた、愛する女性が泣いている。別の男の為に、気丈に振る舞ってきた女性が泣いている。

掛けられる言葉など、見つかる筈がない。ベルカは今日、自身が想いを寄せた唯一の人物を失ったのだ。７年間伝える事のできなかった思いが、一気に弾けて消えていく。心には依然として苦みが広がり、後悔だけが脳裏を支配する。いくら泣いても、ジェシーは戻ってこない。失った命は、絶対に戻らない。

コールの家。白い家具で統一された室内は清潔感溢れる空間。いかにもコールらしい部屋だ。そんな部屋のベッドで、失意のどん底

に突き落とされた女は目を覚ました。目の周りは隈になり腫れて、身体は思う様に動かずに起き上がる事もできない。
あの後、ベルカはコールに連れられてこのマンションの一室に連れてこられた。コールが家に戻るのは危険だと判断して連れてきたのだ。帰りの道、まるで魂が抜け人形ようになったベルカを支えて、ふらふらと歩きながら、手紙の内容を思い出した。非常に残酷で、人の想いを踏み躙る、手紙の内容を。

【これでおあいこ。邪魔者は一人になっちゃったね。君が大切に想ってた男、最後までフィアンセを殺された悲しみを叫んでたよ。結局は僕に切れたけどね。僕の邪魔をしたらこうなる。
これで分かったでしょ。だったら邪魔をしないでください。あ、そうそう。男の人ね、君の名前を言ってたよ。ベルカには手を出すなって。優しいね。優しいから罪深いね。婚約者がいるのに、きっと君の事も好きだったんだ。でも
気持ちを言えずに、もう一人の女と結婚する事にした。愚かだね。言えば良いのに。君もだよ、言えば幸せになれたかもしれないのに。臆病者だね。また邪魔をするなら、僕はまた一人大切な人を貰う、今度は……返してあげません。僕が人形にして、傍に置きます。それじゃ、バイバイ〜】

「お前なんかにジェシーの何が分かんのよ！」ベルカの心からの叫びが耳から離れない。人を完全に馬鹿にした手紙。絶望しない人間等いないだろう。愛する者を失う悲しみは計り知れない。コールもまた、同じだ。下手をすれば、ベルカも殺される可能性がある。何としても、それは避けなければならい。
あの日の様に、もう大切な者を守れづに失う訳に、いかないのだ。
五年前。コールが17歳の時。不運にもコンビニ強盗と出くわし、一緒に歩いていた彼女が撃たれてしまった。その時、コールは恐怖で動けず、逃げていく犯人を見送り、彼女まで救う事ができなかっ

た。目の前で胸のやや下を撃たれて吐血しながら苦しむ彼女の手を握るだけで何もできない自分に絶望し。彼女を失った後、彼女の父親に殴られて奥歯を折り、涙を流しながら謝ったあの日の夜。少年は刑事になる事を心に誓った。犯人を捕まえる。そして償いさせる。その一心で頑張ってきた。そして今、また愛する者を失う可能性が出てきた。コールは、再度誓う。もう、愛する者は絶対に失わないと。

三章：赤い花（1）

「ベルカさん。大丈夫ですか」
純白のカバーに包まれた枕に顔を埋めながら、動こうともしないベルカに、コールは何時もと変わらない声色で声を掛けた。ここで意識した言葉を掛けるのは、かえって掘り返すと判断したのだ。
「……」
返事をしない。いや、言葉も出せない状況。喉が枯れ、掠れた息だけが抜けていく。
「ベルカさん」
コールは依然としてベルカの名前を呼び、そっと背中を摩る。起こそうとしているのがよく分かる。変わらないコールの優しさが、辛い。こんなにも人に迷惑を掛けている自身に、ベルカはどうしようもない苛立ちを覚えた。
いつも気丈に振る舞ってきた自身が、今では泣く事でしか自分を支えられない程崩れている。こんな悔しさがあるだろうか。大切な同僚を失い、年下の男に守られる。ベルカのプライドは、もうぼろぼろだった。
枕に顔を埋めていると、ゆっくり布団を剥がされた。コールの判断は何時も的確だ。
このまま寝かせておくよりは、動かした方が楽になる。その判断力に、救われた。

「ベルカさん。朝食を作りました。食べましょう」
「……コール」
「何ですか？」
「……起こさないでって言っても、私を起こす？」
「起こします」
その言葉に決心した。この青年は、必死に元気づけようとしてい

る。その優しさに、甘えてみようと。
ベッドから起き上がり、不意に、自身の服装を見てみる。服が変わっている。明らかに大きな男物のTシャツにズボン。コールの物だ。服を着せた本人は寝室から出て、テーブルにトーストとハムエッグを並べている。鼻を利かせると、心地いいコーヒーの香りが漂ってきた。
依然として目の周りは腫れて隈になっているが、頭は冴えてきた。やはり起きて正解だ。色々考えずに済む。冷たいフローリングを踏みしめて脱衣所に行き、鏡を見ると、思わず自身の荒み加減に呆れてしまう。酷い窶れ様だ。これが私かと思いたくなる程、惨めな姿。勢いよく顔を洗い、洗いたてのタオルで拭くと、意外なほど清々しかった。どんな事があっても朝は必ず来る。そう実感させられ、鏡の周りを見てみると、いかにも男の家らしく、歯磨き道具と洗顔料しか置いていない。
軽く頬が緩むのを感じると、つくづく、自身が弱っている事を実感せづにいられない。何気ない平和な時間が、妙に心に滲みるのだ。

※【うーん……。どうやったら……あの人を僕の人形にできるかな。ねえ、ラドール。君はどう思う？】
「……貴方の思うままに」
暗がりの部屋で、鎖に繋がれた一人の少女が掠れた声で言葉を紡ぐ。服も着ておらず、剥き出しになった身体は異常に白く。まだ女としての膨らみを持たない胸が微かに上下し、縫い傷だらけの手足をまるでキリストの様な体制で板に張り付けられている。
ピエロが作った狂気の結晶。
ピエロは少女の言葉を聞いて、口元を三日月の様に吊りあげた。ピエロの狂気はこれから始まる。絶望の秒読みが開始されたのだ。新たな恐怖が、暗がりの部屋をゆっくりと出て、新たな獲者を求めて躍動する。ピエロの不気味な微笑が、静かに血に染まる。

「コール。あんた、私の服どこにやったの？」
脱衣所から出てきたベルカは、朝食を並べ終えて朝刊を読んでいる青年に声を掛け、態とらしくTシャツの裾を摘まんでみせた。途端に、青年の顔が真っ赤になる。
「あ、すみません！　別に下心は無いんです！　本当に！」
子供みたいだとベルカの脳裏に過る。そういえば、ジェシーも昔は、コールの様に真っ赤になっていた。懐かしい記憶が一瞬蘇り、消えていく。彼が生きていたなら、どれだけ笑えただろう。今では、虚しさしかない。
目の前で、顔を真っ赤にして必死で冷静を保とうとしている青年に目をやると、新聞の一面が目に入った。
またしても死体、この殺戮いつまで続く。何とも適当なタイトル。写真は――ジェシー・グレイハワード。
そして隣には、御馴染の記者の顔写真。苛々が募る。眉間に皺が寄るのを感じながら、いそいそとコールの向かい側の席に座り、コーヒーを一口啜った。眉間に皺を寄せている事にコールが気づくまでに４秒。
コールは慌てて朝刊を閉じて隣のゴミ箱に押し込んだ。心配そうな目をして見据えてくる青年に、ベルカはコーヒーを啜りながら、目をゆっくりと閉じて見せた。気にするなという合図だ。
嘗て、ベルカとジェシーが一つの大きな事件に関っていた時。目で合図する事が当たり前になり、日々の生活でよく使った。４年前の事だ。
その時の癖が、今でも残っている。無意識の内に眉間に皺が寄るのも、目を閉じるのも、全てジェシーとの日々でできた癖。引きずる事を嫌ってきた自身が、今では癖を一つでもする度に折れそうになる。
心の弱さが浮き彫りになり、耐えられない程の悔しさが込み上げてきた。口に出さなくとも、本当は辛い。素直にそう言えたら、どれ

だけ楽だろうか。
――私も女。
自身を蔑み笑い飛ばしてやりたくなるのを堪えながら、平静を装い、目の前の青年に心配させまいとする。目の前で心配そうにこちらを見据えている青年が、自身の心の内を理解するまでには時間が掛るだろう。それでも、理解される事を望んでいる。
今は、この平和な時間を共有し、心の綻びを癒したい。そう思う事は、自分勝手だろうか。

「コール、気にしなくて良いから」
ふわふわに焼かれたスクランブルエッグをトーストに乗せて齧り、足を組み変えながら何時もの声色で口にした。コールの焼いた卵は程良く塩コショウが効いており、良い味だった。
「……どうしてですかね」
「何が？」
また一口トーストを齧り。コーヒーを啜る。
「どうして、ピエロはジェシーさんを……殺したんでしょうか。ベルカさんがジェシーさんを大切だと思ってるとは知らない筈なのに」

「……」

――確かにそうだ。
どうして、ジェシーは殺された。ベルカの事をよく知る人間でなければ、ジェシーに想いを寄せている事を知る筈がない。
ベルカはコーヒーを置いて眉間に皺を寄せながら暫く思考を巡らせる。真っ先に浮かんだのは、署の中で、自身をよく知る者の犯行。
考えればその線が一番怪しい。
ジェシーの婚約者を殺すのにも、署に居れば誰もが知っている。あれだけ幸せそうに話していたのだから。そして、手紙も荷物も、簡単に入れられる。

急速にベルカの思考が巡る。しかし――今は停職処分中。
捜査する事ができない。

どうする。困り果てて、コールを見ると、全てを理解した様な顔で青年は目に闘志をひめていた。余程表情に出ていたのだろう。
コールは、ベルカの目を見据え、深く頷く。
「俺に任せてください。ベルカさんの代わりに、俺が調べます」

三章・赤い花（2）

※　そして三日が経ち。ベルカはコールの家に居続け、コールが持ち帰る書類に目を通している。
ここ最近の署に出入りしている人間、ジェシーと自身をよく知る人物の履歴、行動、全てをコールは仕事の合間に調べて持ち帰ってくるのだ。自分の仕事もあるだろうに
コールはよく働く。頭の回転が速いのもあるだろうが、それ以外に、コールはよく人に好かれている。元々、人当たりの良い性格である彼は、どの部署の人間とも面識があった。行動を調べるのも「捜査の練習なんです。内緒にしてください」と言えば簡単に情報が手に入る。
ベルカだったら、そうはいくまい。調べればすぐに知れ渡り、上司に文句を言われるのが関の山だ。つくづく情けない。

夜、青年は毎日１１時に帰ってくる。鞄に沢山の書類を詰め、空いている手で白ワインを一本とチーズを持って。
意外だと良く言われると、本人は苦笑交じり話していた。何を隠そう、コールはかなりの酒豪である。どんなに飲んでも殆ど酔わない。それを彼は、若干疎ましく思っているらしく、偶にストローで酒を飲む。酔いがまわり易いと聞いたのだ。
辛い時や悲しい時に、酒を飲み、忘れたくても酔う事ができず。苦い思いをしてきたらしい。そして、コールは毎日酒を飲む。一本を飲まないと落ち着かないのか眠れないのだというが、実際は、軽いアルコール中毒だ。本人は、多少の酒は健康に良いと信じているようだが。
「ベルカさん。戻りました」
　コールの声が、ダイニングに響いた。若干苦笑交じりの声色で。
「おかえり」

「あ、ただいまです。また、電気点けてないんですね」
コールがそう言った瞬間、白を基調とした部屋が一層明るくなった。ベルカは、普段から電気スタンドの明りを頼りに書類や書物を読んでいる為、電気を点ける事が殆どないのだ。何度か変だと笑われたが、気にしない性格の為に、直す事は無い。
そして、ベルカは眼鏡を掛けている。視力が悪い理由をこの明りのせいだとよく言われるが、眼鏡である事も、視力が低い事も気にしてない。もっぱら集中したい時やしている時にしか掛けないのだから。仕事にも支障はなく、書類も近くで見れば見える。
ベルカは眼鏡を外し、首の骨を鳴らして、両腕を高く上げて伸びをすると、コールの方に顔も見ず手を伸ばし、書類を渡すよう催促した。この三日間、全く同じ行動だ

差し伸べられた手に、コールは書類を載せなかった。その代わり、暫し躊躇した後、遠慮がちに少し近づいて、ベルカの手を取ると軽く握った。
「え……コール？」
突如感じる人の温もりに、当然の反応をしてコールに視線を向けると、まだ若い苦笑が帰ってきた。表情で分かる、青年は、またも気を利かせて、何かを伝えようとしていると。すぐに、理解できた。渋々腰を上げ、ダイニングテーブルに手を引かれて座ると、コールは満足げな笑みに表情を変えて、テーブルにチーズとワインを置いて、グラスを取りに向かった。
本当にこの青年は人の心をよく読む。
「コール……何で分かったの」
「何をですか？」
グラスを二つ持って戻ってくる相手にそう声を掛けると、大袈裟な反応で誤魔化す様な言葉が返ってきた。渋々椅子に座り、居心地の悪そうな顔をしてそれを見据える自身を、青年はどう思っているのだろう。考えようとして、止めた。馬鹿らしい。この歳になって

一人の男も愛せぬ女が、男の心など読めるはずがないのだ。現に――ジェシーの心すら読めなかった。
七年共にいて、一切気づかなかったジェシーの気持ち。ピエロの手紙で全てを知る事になって、自身の心に一番痛手になった事だ。隠れて泣いていた事もあるかもしれない、自身の我儘に嫌とも言わずに一緒にいてくれた、最高の相棒。思えば、相棒と思い始めてからかもしれない。
ジェシーを、一人の男として見れなくなったのは。恋心は確かに抱いていた。だが、心のどこかでは一緒にいる事が当たり前になっていて、踏み出せないでいる自分がいた。そしてこの結果だ。失ってから気づくとよく言うが、まさか、ここまで本当だとは。思い出して、椅子に右膝を立てて、乱暴に髪を掻き上げ溜息を吐いた。もう忘れなくては、ジェシーへの気持ちは。今は、狂ったピエロに集中しなくてはならない。敵を討たねばならないのだ。

「ベルカさん。あまり、一人で悩まないでください」
その様子を見ていたコールが、心配そうに言いながらワイングラスに白ワインを注いでいる。ワインの仄かな甘い香りと、チーズ独特の香りが鼻孔に入ってきて、ふと、緊張が解れた様な気がした。久しぶりだ、こうして酒を飲むのは。
「私が悩んでる様に見える？」
一口ワインを口に含み、ゆっくりと喉に流し込んでから、おどける様に言ってみる。想像した通りの反応がくると考えて。
「見えますよ、その目の下の隈。眠れてないんじゃないですか？」
きた。
「コール。素直に聞くのは直した方がいいわよ」
「え？」
「取り調べの時に相手に呑まれるから」
コールの表情が困惑した様に凍りつく。それを見て不敵な笑みを浮かべると、またしても苦笑が帰ってきた。二口目を口に含んで飲

み干し、軽く頷いて見せると、相手も頷いた。
「ごめん、話しの腰を折って」
「いえ」
「私は大丈夫だから。心配しないで」
「心配するなと言われると、逆に心配しますよ」
「……」
言葉に詰まった。いつもなら「じゃあ、心配して」と、ふざけて返す余裕があったのだが。今は、その余裕が無かったのだ。無言でワインを口に含み、暫く思考を巡らせて
「大丈夫。私は本当に大丈夫」
そう繰り返すしかなかった。

コールは、ベルカの言葉を聞いて、渋々納得した様にワインを一口飲んで、苦笑しながらも頷いた。これ以上言っても、変わらないと思ったのだろう。
一瞬、重い空気が流れた。肩が凝る。耐えきれなくなって先に口を開いたのは、ベルカだった。話題を変えなければ、息ができない。
「コール、私、明日ちょっと出てくるから」
「え、でも。一人歩きは危険ですよ。もしまたあんな事があったら。それに……外出は禁止されてますよ」
「コールが黙って入れば良い。それに、今度こそ自分の身は自分で守るから」
「でも、駄目です」
「良いから。ほっといて」
「駄目です」

「これを逃したら、もう会う機会なんてないのよ。だからほっといて！」
思わず、声を張ってしまった。
ベルカには、隠している事が一つある。ジェシーですら知らなかっ

た、大きな秘密が。明日、土曜日だけ会う事が許される人物が、ベルカにはいる。この世で一番守らないいけない存在が。コールはベルカの大声に驚いて、目を見据えていた。そして、必然的に浮かぶ疑問を口に出す。

「会えないって、どういう事ですか」

三章・赤い花（3）

ベルカの口から飛び出した、「これを逃したら会えない」という言葉。言ってしまったという後悔の念が心を支配し、思わず眉間に皺が寄る。目の前で不審な目をしてこちらを見据え質問してくる青年の視線が痛い。

数秒の間をおいて。覚悟を決めた。ジェシーにすら言わなかった秘密を、話す機会は今しかないのだ。そして、話さなければ、外出を認められないのだ。そう、自身に言いきかせるしかなかった。

「コール……私には、娘がいるの」

※

六年前。ベルカが２０歳の時、その娘は生まれた。父親は、いない。誰にも言えず、一人で抱えて生きてきた。捜査官ベルカ・ラグライアンの唯一の忌まわしき過去。それは、強姦。

捜査官になる為に必死で勉学に励んでいたベルカに、一人の男が声を掛けたのは、蒸し暑い夏の夜だった。その頃のベルカは今の様な男らしい髪型もしておらず、化粧もしていた。本当に女性らしい女性だったのだ。しかし、その美しい容姿が、彼女を地獄へと引きづり込もうとは。

強姦をした犯人は既に逮捕され、塀の中にいる。たった一回のその事件で、ベルカは心に深い傷を負い、身体に一つの命を宿した。妊娠が判明してから、両親にすぐに卸せと言われ、一度はそう決めた。だが、できなかった。

――この子に、罪はない。

そう、思ったから。

「……生んだんですね。犯人の子供でも、その子に罪はないから」

目の前に座り、顔の前で両手を絡めて小さく呟く青年の顔が。申

し訳なさそうに歪んでいる。後悔しているのだ。聞いてしまったことを。

「良いの。こうやって話せる様になったんだと、改めて実感できた。それに、話せて良かった。今後、私は娘に会えなくなるから。覚悟ができたわ」

表情を見てそう言う。そうするしかない。じゃないと、この関係が壊れてしまうのではないかと恐怖があったから。

「会えなくなるって……どうして会えなくなるんですか？　ベルカさんの娘さんは、今どこに。今まで、一切知らなかったうえに見た事もないですが」

「娘は、養子に出てるのよ」

「養子。って、どうして一緒に暮さないんですか」

「あの時、私には余裕がなかった。だから、養子に出したの。私といるより、その方があの子にとって幸せだから」

「……」

青年は言葉に詰まる。今まで気丈に振舞ってきた女性のまさかの過去を聞いて、瞬時に言葉がでるはずもない。それを見て、話しているとうの本人はというと。苦笑していた。何でもいいから表情を貼り付けていないと、崩れてしまいそうだったから。

娘の話しをするといつもそうだ。心が悲鳴をあげて崩れそうになる。それだけ、今のベルカにとって娘はかけがえのない愛おしい存在でありながら、大きな悲しみの種でもあった。

「でもどうして、会えなくなるんですか。今まで会えてたんですよね？」

「そろそろ他人にならないといけないの。今は、向こうが母親と父親だから。私は、あの子の人生にもう入れない」

頬が引き攣る。言葉が上手く紡げない。

「どうして。その子の母親は、ベルカさん、貴方一人なんですよ」

「知ったような事言わないで」

「あ……すみません」
また、重い沈黙。どちらか片方が身体を動かすたび、服の擦れる音だけが耳に入り。その静寂を引き立せる。そして、先にその空気に終止符を打ったのは。
「分かりました。明日、俺も同行します。それなら許可できますから、よろしいですか？」
コールだった。

朝が来た。コールの承諾が降りて、その後すぐにどちらからともなくベッドに潜ると、泥の様に深く眠り、軽くなった身体で早朝のひんやりとした風を受けて、頭を起こす。今日で最後、そう言いきかせる様に、自身の頬を両手で軽く叩いた。笑顔で去ろう。覚悟はできた。
隣に眠っている青年の肩を軽く摩って身体を揺り動してみた。すぐさま目が開き、だるそうに両手で開ききらない両目を覆って大きな欠伸をしている。ここに来てずっと、自身と青年は一つのベッドで眠っていた。もう、照れる事はほとんどない。相手の身体の温かさを感じて眠る事に慣れて、自堕落な姿を見せる事にも気を使わなくなった。少しの進歩だ、そう、心中で小さく呟いてみると。少しづつ、コールとの関係がジェシーと似てきていると気づく事になる。
――また、仲良しごっこで。これ以上先の関係にはいけない。
「はぁ……馬鹿らしい」
思わず、喉から滑るように言葉が出た。
「え……どうしました？」
寝ぼけた顔でこちらを見据えている青年の顔が妙に幼く見える。
「なんでもない。ほら、寝坊してるから早く着替えて。約束の時間に間に合わないから、朝食は買うわよ」
ごまかして自身のペースに無理やり引きづり込む。一番楽だからだ
「寝坊って……まだ5時ですよ」
「約束の時間は6時なの。私の娘は早起きで、朝から一日中一緒に

いたいからだって」
「早いですね……」
「そうよ。だから早く」
無理やり起こして服を着替えさせると、コールはいつもと同じようにスーツに着替えた。休みだというのに。理由を聞くと、区別する為だとあっさりと答えてみせた。自身は、優しさで許可しているのではない、これも一つの仕事として見ているのだ。そう、自分に言い聞かせる為なのだと。
思わず、笑ってしまった。これがジェシーなら、間違いなく私服で来ていただろうと思って。その時のコールの表情はとても幼稚で、困り果てた子供の様に引き攣っていたのを覚えている。とても、若かった。

過ぎていく街並みを眺めながら、ふと、此間のジェシーとの会話を思い出した。背中に感じる古めかしい助手席の皮の堅さと、伝わってくる振動。コールの車はとても小さく、四人乗りの軽自動車だ。音楽を掛けるわけでもなく、唯無言で運転をする彼の隣で、自身は右手に野菜のサンドイッチ、左手に紙パックのコーヒーを持って、静かに外を見据えている。頭の中で、ジェシーとの会話を思い出しては、サンドイッチを齧って気を紛らわせた。
結婚を嬉しそうに話していたジェシー。頭の中で、今でも笑っている。
「コール、食べる？」
「え。あ、はい」
隣で運転をしているコールの方に身体を軽く乗り出し、口元にサンドイッチを持っていく。コールは前方を気にしながら一口器用に齧ると、首でう頷いて笑みを浮かべた。今は、この青年が隣にいる。そう、内心ほっとした様に、思わず力が抜けるのを感じる。いない人物を思うのは、もう、沢山だ。

「ここですよね、ピリーズ通りって」
「そう。ここが娘が住んでいる場所」
ピリーズ通りは、有名な金持ち等が多く住む通りだ。治安もよく、子供を育てるのには最適な場所だと雑誌に掲載されるほど、綺麗に整えられた家々が建ち並ぶ。
そんな通りの一角に、娘の住む家はあった。養子に出して六年。娘は裕福な家庭の一人娘としてすくすくと育った。週に一度会う事が許される土曜日、少しづつ大きくなる娘が、愛おしい判明、辛く。自身を追い込んだ。その事は、誰にも言っていない。今も、言わない。
「あ、もしかして、あの子ですか？」
目的の場所を目指して歩いていると、突然コールがそう口にした。視線の先に目をやると、公園の入り口前に、薄いブロンドを肩まで伸ばし黄色い花柄のワンピース着て、白い靴を履いた少女が立っている。あれだ。背中に、まるで電気が走ったようになり、身体が強張る。これで会うのは最後。そう、改めて実感する。そして思わず、走り出していた。
抱きしめたい。唯その一心で、少女の元に駆け寄った。

「マリー！」
名前を叫ぶ。気づいた少女は満面の笑みを浮かべ、大きく両手を振る。そして。
「遅いよ！ベルカおばちゃん！」
コールは絶句した。マリーと呼ばれた少女は、母であるベルカを、母とは言わなかった。ベルカの感じる悲しみの大きさを今理解したのだ。自身が生んだ娘に、母と呼ばれない母親。その苦しみと悲しみを想像しただけで。自然と、拳を強く握りしめていた。

三章：赤い花（4）

時は過ぎ、時刻は１０時。何をする訳でもなく、公園をふらふらと歩いたり、ベンチに腰掛けて話しをしたり。唯過ぎるまま、のんびりと時を過ごした。日差しは強くとも冬の風は身体に沁みる。ワンピースの上から薄いカーディガンを着ているだけのマリーは、少し寒そうに両手を擦り合わせて息を吹きかけていた。その姿を、隣で心配そうに見据えているコールの表情は穏やかで、父親のそれに似ていると、内心静かに思ってみる。

しかし、マリーは流石私の娘だ。

「大丈夫？」

「大丈夫。もうコール、しつこいよ」

「心配なんだよ」

大人ぶった口調で言い返してくる少女に、コールは苦笑するしかなかった。優しい性格故に子供の扱いは不得意なのだろう。それはものの見事に、６歳の少女にあしらわられている。

「子供扱いしないで。私は大丈夫」

自身と似た様な言葉を口にする娘。傍にいなくても、子供とは勝手に親に似てくるのだろうか。娘の後ろ姿を眺めながら、ふと考えた。これが最後なのだ。その小さな背中を眺め、悲しみと疎ましさを感じるのは。何故だろう、無意識の内に涙腺が緩む。覚悟とは、実に脆いものだ。いや、自身が弱いだけなのか。

「マリー。あまりコールを苛めないで」

「ベルカおばちゃん、だってコールがしつこいから」

「ベルカで良いの。私はおばちゃんって歳でもないわ。呼ぶなら、ベルカ」

「でも……ママが。そう呼びなさいって」

「……良いから。ほら、呼んでみて」

「……ベルカ」
「よし、良い子」
頭を撫でてやる。そうすると嬉しそうな笑みが帰ってくるから。二人のやり取りを眺め、すっかり蚊帳の外のコールは、依然として苦笑していた。その裏では、人の心を細かく察知する頭の良いコールが無理やり笑っているベルカの心を読み取ろうと必死に動いている。つくづく、優しい性格だ。

更に時は進み、１２時。公園には子供連れが目立ち始め、昼食を広げて楽しそうに話しているのどかな光景が増えてきた。考えてみれば、こうやって三人で歩いている光景はどのように見えているのだろう。一度離婚して子連れの女と、まだ歳若い旦那。そうにしか見えないかもしれない。思わず、笑ってしまった。
昼食を考えながら歩いていると、その時は突然やってきた。マリーが、親に言われて帰らなければならないのだ。昼の１２時。本当ならまだまだ時間がある。親が、邪魔をした。別れの最後の大事な日を。親の特権で邪魔をしたのだ。こんな理不尽な事が、許されて良いのか。心に、何とも言えない苦みが広がる。
「ごめんなさい。次の土曜日また会えるよね」
もう会えない。
「今度はお昼ご飯を食べながら話そうよ」
計画なんて立てても。無駄だ。
言葉が喉を通らない。隣で困った顔をしているコールが、マリーと自身を見比べている。どうして良いのか、分からないのだ。
「マリー……」
「ん？」
「また会える。次の土曜日は無理だけど、きっと、いつか」
「いつか？」
「そう。いつか」
嘘をついた。最後の最後で、しょうもない嘘を。自身が、憎い。

覚悟を決めていたのにも関わらず言えなかった。逆に悲しい思いをさせる事を言ってしまった。なんと愚かなのだ。心の中で何度となく叫んだ――この弱虫が！

別れを告げ、公園の入り口でマリーと別れた後。車に向かう道のりで、声を殺して泣いた。終わった。その思いだけが心を支配し、飲み込んでいく。これで娘との全てが終わったのだ。

三章・赤い花（5）

コールの家に戻る車内。鼻を啜る音と、小さく零れる嗚咽だけが聞こえていた。悲鳴を上げる軽自動車のオンボロエンジンが、なんとも悲しげに聞こえる。

冬化粧をした街並みはまるで自身を置き去りにしていく様に流れて行き。いつもの廃れた街並みが現れる。一時間、会話は無かった。隣で運転をしているコールの表情は硬く、言葉もみつからない様子で、しっかりとハンドルを握り運転するだけだ。一日がこれで終わったのだと思うと、心が握り潰されそうになる。これでマリーとの関係は終わり、もう一生会う事は無い。大事な日の最後にしょうもない嘘をつき、そして逃げる自分が、なんとも憎らしく、そして悲しい。そんな事を考えていると、コールの家が見えてきた。古めかしい佇まいは自身の家と似ていてどこか落ち着く。

今日はもう寝よう。昼の1時、薬を飲んで眠れば夜まで目は覚めない。早く、一日を終わらせて明日を迎えたかった。

「コール、私少し寝るから」

「ああ……はい」

言える言葉はない。唯、従うしかない。コールの心中は、揺れていた。

「夜になっても起きなかったら、そのまま起こさないで」

「……分かりました」

相手の言葉を確かめて薬を口に含む。小さな錠剤の粒はすんなりと喉を通り、ベッドに入るとゆっくりと眠りに落ちていく。ゆっくり眠ろう。唯それだけを、考えた。

――ベルカさん。俺は、少しでも貴方の役に立てていますか。

眠りに落ちていくベルカを見据えながら、青年は小さく呟いた。

そして、一人家を出て行った。テンポの良い皮靴の踵の音が響き、またオンボロのエンジンが悲鳴を上げる。
微かに残るベルカの薄い香水の香りが、自身を包み込むのを感じ。煙草を一本。前方のダッシュボードから取り出して火をつけた。ベルカの前では決して吸わない。目を盗んでは吸う煙草は、タールが多く含まれる銘柄の物だ。酒に煙草、自身は早死にするだろう。そう分かっていても吸う。中毒者の、証しだ。
「さて……行こうか」
コールは車を発車させ、窓を開ける。進んでいる道は、さっき戻ってきた道。ピリーズ通りに向かう道だ。
この行動から、少しづつ。コールとベルカの間に亀裂が入り始める。後々分かるコールの単独行動の意味が、二人に、深い溝を作るのだ。

思った通り、薬の効果は絶大だった。深い眠りは夢を見ないというのは本当の事で、ベルカは夢を見る事なくその深い眠りに浸り、時間だけが過ぎていく。だが、その深い眠りは、突如として鳴りだした携帯電話の着信音によって、中断された。
手探りに携帯を探し、乱暴に掴むと虚ろな目で画面を見据えると。着信は、コールからだった。同時に時計を確認すると深夜１１時を指している。
――こんな時間に電話。どこに行ってる？
脳裏に当然の様な疑問が浮かぶ。こんな時間に、何処にいるのだ。そう思いながら、睡眠を妨げられた事への文句を言ってやろうと、電話に出た。
「コール、あんた今何処にいるの？　起こさないでって言ったでしょ」
「……」
「ちょっと、コール。聞いてるの」
「……」
「コール？」

返答が無い。電話の向こうは、息遣いすら聞こえない程の静寂に包まれている。いや、微かに、小さな、怯えた息遣いが聞こえた。早く、途切れ途切れに聞こえる息遣い。まさか。

「コール！　どうしたの！　返事しなさい！」

思わず嫌な予感がして叫んだ。何かあったのでは。事故、または事件。そんな言葉が頭を過る。だが、ベルカの叫び声に返事をしたのは。

【ひゃはははは！】

不気味な甲高い笑い声。

【馬鹿だな……画面に出る人の名前だけ信じちゃ駄目だよ】

馬鹿にする様な声色。

【こんばんは……ベルカさん。もう、分かるよね？　僕だよ】

間違えようがない。人を馬鹿にし、心を踏みにじる言葉を並べたて、大切な人を手にかけた。今自信がもっとも憎いと思い、同じく手にかけてやりたいと思う人物。殺人鬼、気狂いピエロだ。今回は偽物ではない。声色で確信する。人を馬鹿にしながら、その裏では人の心を観察し、的確に破壊してくる言葉。偽物とは違う、知性を感じた。

怒りが込み上げる。それと同時に恐怖も、込み上げてくるのを感じる。支配されては駄目だ。この狂った相手に、呑まれては駄目だ。

額に、脂汗が滲む。

【どうしたの？　黙っちゃって。あ、そうか、僕が恐いんだ】

「黙れ」

【僕が憎いんだ】

「黙れ」

【僕を……殺したい？】

「黙れ！」

駄目だ。完全に、相手のペースに乗せられている。このままでは。

そう、思った矢先。

「ベルカ！……」
電話の向こう、ピエロの背後から。小さな少女の叫び声が聞こえた。その声には聞き覚えがある。自身が生み、そして離れ離れになった娘。マリーの声だ。背中に、悪寒が走る。より一層、恐怖が大きくなる。マリーが、殺されてしまう。
【聞こえた？　君の大事な人の声】
「マリー……マリー！」
ピエロが楽しそうに、【さぁて……どうしようかな？】と撫でるように言葉を紡いだ。時間がない。涙が、恐怖で溢れた。頬を伝い、喉を流れる。娘が殺される。無残な姿にされる。そう思うと、口が勝手に叫んでいた。
「止めて！　マリーに手を出さないで！」
心からの叫びだ。しかし、ピエロが、聞くはずもなく。短く不気味に笑うと、電話は、切れた。
時が止まる。音の無い携帯が手から滑り落ち、ベッドの下へと転がった。身体を支配す失望感。喪失感。声にならない恐怖、悲しみ。頬を伝い落ちる涙。
保てなくなって。へたり込みながらベッドを殴った。何度も何度も。
「マリー……マリー……マリー！……」
声を張り上げ叫ぶ。しかし、それに応える者は、誰もいない。

四章：天使の頬笑み（1）

暗闇の中、外の街灯だけが差し込む室内に聞こえるのは、ピエロの生温かい声と怯える少女の早い息遣いだけだった。ピエロの背後には、血に染まった白い大きな壁と、そこに貼り付けにされ少女とピエロを見据えている両親の死体。部屋中に濃い血の臭いが充満している。完全に狂った、地獄絵図の様な光景が広がっていた。

※　夜の１０時。その狂気はマリーの家にやってきた。大きな花束と、太い紐を二本持って。

時間が時間なだけに、治安が良いとされている通りに通行人の姿は無い。誰にも見られず、知られず、ピエロは閑静な住宅街に建つ一番大きな家のドアを、それは楽しそうな笑みを顔に貼り付けて、叩いた。見られていても、ここなら通報されない確信がある。何故なら、ここは金持ちの集まる住宅街。ピエロを家に招き、驚かせるイベントは日常茶飯事だからだ。これから始まる、ピエロの喜劇の幕が開く。もう、戻れない。進めば進むほど、後にあるのは、残酷な死のみ。今回の被害者はマリーの両親。ゆっくりとドアが開く。残忍な喜劇が、始まった。

「はい。どちら様ですか？」

初めに顔を出したのは、マリーの母親ローラだった。治安が良いと安心してすぐに鍵を開ける癖があるのを、ピエロは知っていた。この数日、ずっと監視していたのだ。両親の動きを、そして、悪事を働くその時をずっと待っていたのだ。そして今日、マリーの母親ローラと、父親ルイスは、悪事を働いた。

本当の母親であるベルカに、深い心の傷を付けた。それが二人が働いた悪事。ピエロは全てを見ていた。そして、裁きが下る。――今日、殺してやろう。

外の空気はいつも以上に冷たい。もうすぐ、雪が降るだろう。

「こんばんは奥様、旦那さんに呼ばれて参りました」
満面な笑みを浮かべ、嘘を並べる。想像通り、母親は疑いもせず、想像通りの反応をして、ピエロを家に入れた。「外は寒いから、中にどうぞ。今、主人を呼んできます」と、楽しそうに小走りで奥のリビングに向かって行った。
外から見た通り、中も広い。白を基調にした内装、磨かれた床。鼻につく強い花の香りは、置かれている花瓶に挿された薔薇の物。ピエロは動く。足音も立てず、静かに、リビングへと進んだ。驚愕している夫のルイスと、それを演技だと思っている妻ローラの会話が聞こえてきた。

「こんばんは、旦那さん……」
ローラの背後に立ち、不気味に囁く。驚愕した夫婦の顔が向けられ。そして、言う
「俺はピエロなんて呼んでないぞ」
と。当然の言葉を。その言葉を聞いて、ピエロは三日月型に吊り上げた口元を、更に吊り上げ、言葉を紡ぐ。
「僕も呼ばれてはいません。勝手に来たのです……貴方達の命を、貰いにね」
夫婦ははっとした。だが、もう遅い。

ピエロは持ってきた花束の中から、小型の斧と、刃渡り15？のナイフを取り出し、妻が悲鳴を上げるよりも早く。首の付け根、右腕の間に斧を振り下ろした。文字通り、大量の鮮血が飛沫を上げて飛び散り。妻は、足元から勢いよく崩れ、言葉を出せずに、唯口を魚の様にぱくぱくと動かしている。返り血を浴び、赤い斑点の様になっているピエロは、その光景を見て、さも楽しげに、笑っていた。
次に、それを見ていた夫に視線を向け。「さぁ……次は貴方だ」と、狂気を露わにした瞳で見据え、わざとらしく、ナイフを一度見てからゆっくりと歩み寄る。やはり、当然の行動を、相手はした。

逃げる、いや、後ずさる。あまりの恐怖に言葉を出す事を忘れ、冷や汗を流しながら、必死に威嚇をして。そして、泣きだす。
「止めてくれ！　俺が何をしたって言うんだ！」
「……自覚がないのか」
「自覚！？　何の事だ！」
「……アンタは本当の大馬鹿だ……気づかないなら、そのまま地獄に行けよ……」
　刃渡り１５？のナイフを持ち直し、相手に襲いかかる。避けられず、脇腹に深く食い込む刃が、脂肪、筋肉を斬り裂き、内臓に到達すると、縦に斬り込まれ、赤黒い血と共に肉片が付いてきた。鮫の牙の様な形状になっているナイフは肉までも剥ぎ取り、抜く際にも大きなを傷を与えるのだ。呻き声を上げて崩れ落ちる夫。朦朧とする意識の中、視線の先に。
驚愕し、青ざめた顔をした娘の姿が、映った。

四章：天使の頬笑み（2）

蒼白したままの少女を尻目に、ピエロは淡々と行動した。血塗れの両親の亡骸を抱え上げ、先に母親を、壁に打ち付けた釘に持ってきた紐を掛け、首を吊らせる形で吊り上げる。まるで、見せしめだと表現する化の様に。父親も同じく首を吊らせた。悲鳴を上げる事すら忘れ、只見ている事しかできないマリーは、小さな両手を握りしめ、その幼い手の平に爪が刺さる痛みすら感じず、絶望の淵へと追いやられている。狂った道化師は、幼い少女の心すら破壊する事を楽しんでいるのだ。相手が逃げないと確信して、拘束する事もせず、その場の空気と時間で行動する事すらできなくし、そして支配する。支配されたら最後

――もう、逃げられない。

「さて、時間だ……今、君のもっとも信頼すべき人の声を聞かせてあげるよ……」

そして、あの電話が鳴った。ピエロの悪ふざけだったのかもしれない。しかし、本心だったとも取れる。何故ならマリーの両親を殺した理由が理由だから。

思わずベルカの名を叫ぶ事も計算して、あえて電話を全体に聞こえる様にし、マリーの声が拾えるように距離をとった。これはせめてもの優しさだったのかもしれない、だが、狂気に狂った人間がする事は、全て裏目に出る。現に、ベルカは深い悲しみと絶望を味わった。娘が殺されてしまうという恐怖は比類無きものだ。何故、あれ程までに人を馬鹿にし、最愛の人々を次々と手にかけたピエロが

――ふっ……ふふふ……僕の心は分からないだろうね……親愛なるマリア……貴方にも、僕の心は読めないだろ……笑える程……深い闇が口を開けているんだからね……。

【ひやはははは！】

突然甲高い笑い声を上げると、手に持っていた電話を放り投げ、さも楽しげな笑みを浮かべて、恐怖に怯える少女へと偽りの笑みを近づけた。白塗りの肌は血で汚れ、口元は吊り上がり、目は狂気に血走り、そして脈は速く、静寂に包まれた暗い部屋に微かに響く。

【さて……どうしようか……。ベルカさんの声も聞いたはずだし……そろそろ……君も僕の……】

「いやっ！」

マリーがピエロの言葉を制した。身体は震えているものの、その声は凛とし、はっきりとした意志を持っていた。ベルカの声を聞いた事で、彼女の中にある人間としての生きたいという思いが勇気を与え、自身の両親を殺した相手に対する強い憎しみが、叫ばせたのだ。

【……へぇ……流石はあの人の娘だね……。でも……逃げられるかな？　この僕から……】

ピエロは幼い少女の言葉に等臆する事は無く、そう言葉を紡ぎ、今にも泣き出しそうなマリーへと手を伸ばそうとした。その時だ。

「気狂いピエロ！」

怒りと殺意を込めた渾身の叫び声が部屋中に木霊した。そして、それと同時に、耳を劈く銃声が響き。時間は、一瞬だけ止まる。動き出した時には、ピエロの呻き声と共に、勢いよく駆け寄る足音、マリーの驚いた悲鳴、そして、三人の乱れた息遣いだけが、空間を包んだ。駆け込んできた人物は足を撃たれ、倒れこんだピエロの元へと歩幅一歩分の処まで近づくと、頭上から銃口を向け、息を絶え絶えに荒げながら、威嚇を続けた。差し込む街灯の明かりが顔を照らしだす。

顔を確認するなり、幼い少女の緊張の糸は、それは簡単に切れた。そして、心から叫んだ。

「コール！」

「マリーちゃん！　怪我は無い？　歩けるなら俺の傍に！　早く！」
銃口は倒れている相手から外さず叫び、マリーを自分の背後へと呼ぶと、次は尋問をすべく目を血走らせ、荒げた息遣いのまま言葉を発した。怒りを込め、狂気にも臆さない強い意志を込めて、気を張り詰め、支配されない様に力強く。しかし、この時――コールの肋骨には罅が入り、体中痣だらけで、意識が飛びかけている状況だった。

※

実は、この惨劇が起こる前、一人決意を固めた青年は。恐らく狙われるであろう幼い少女と、その両親の家を張り込んでいた。確証など無い。只、今までの事から推理すると、ピエロは必ず、ここに来る。自身が思いを寄せる人物の周りを付きまとい、苦しめ、痛めつける犯人を自身が、殺す。コールの心には、深い殺意が蠢いていた。冷静沈着で温厚だと言われる性格。だが、その心の奥底には、常に緊張で張り詰めた恐怖心と臆病な自分が隠れている、今もそうだ。常備している拳銃を眺め、肌に鉄の冷たさと重さを感じ、視線の先にある大きな扉をただ睨みつけた。

「俺が……守る」

足が震え、口が渇き、言葉がまともに喉を通らない。腕に力が入らず、思わず逃げ出したい衝動に駆られたが。逃げる事は許されない。――覚悟はできてるんだろ？
自身に言い聞かせるように繰り返し、歯を食い縛りながらゆっくりと目を閉じてみた。車の中は外気によって冷えきり、音は無く。自身の鼓動と、息遣いだけが、空間を支配し響いていた。目を開くと、闇の中にぽつぽつと浮いて見える街灯が妙に不気味に思え、気持ちを紛らわそうと、車を降りて煙草に火を点けた。
個人で勝手に決めた事を、愛する人は怒るだろうか。いや、下手を

すれば殴られるかもしれない。少し、笑えた。くだらない事を話し、同じ恐怖を味わい、同じベッドで眠り、同じ秘密を共有する。自身が朝食を作り、目の前で新聞を読みながらトーストを齧る相手を眺め、電気も点けずに何かをする相手に苦笑し、一緒に酒を飲み。――何だ……全部ベルカさんの事だ。

今考える事で少しでも温かみを感じる中心には、いつも彼女がいた。コールは自覚する。自身はベルカの事が好きなだけではない。愛している、と。そう、決意をより深くした時だった。

後頭部にとてつもなく強い衝撃と、脳を貫くかの様な激痛がコールを襲った。一瞬の内に、意識が遠のく。遠のく意識の中で見たものは、二人の全く同じ顔をしたピエロと、その手に持たれた鉄パイプ。――そうか、襲われたのか、自分は。

「やれやれ……邪魔者はいつだっているもんだけど。こうもしつこいと厄介だな……」

「文句言うなよ、これもあのお方の命令なんだからさ……」

甲高い声と、低い声が聞こえる。

会話をしている二人のピエロの顔は歪んで見え、背中に感じる地面の冷たさと固さは徐々に薄れていき。向けられた不気味な二つの笑みが、怪しく月明かりで光っていた。襲われたという自覚が殆ど持てないまま、コールは地面に顔をつけ、全身を硬直させて、ただ、なすすべなくされるがままだった。――動け！　動け！

「こいつ……まだ意識がある」

「本当だ」

「命令では……完全に、だったよな」

「うん……」

「じゃあ……こうしてやろうか……」

身体を幾度となく蹴りつけられ、肋骨が悲鳴を上げた時、コールの意識は完全に落ち。そして、あの惨劇が起こったのだ。――チクショウ……。

意識が戻ったのはその数分後。
二人のピエロは完全に意識が落ちたのを確認した後、忽然と姿を消した。意識が戻り、身体の激痛に耐えながら、見張っていた場所を慌てて確認すると。この地獄絵図だった。ピエロは、全て計算していたのだ……。何もかも。

「なぜジェシーさんを殺した！　子供達ばかり狙ったのはなぜなんだ！　答えろ！」
【……】
足が震える。頭が痛い。身体が痛い。口内が切れて鉄の味がする。
「答えろ殺人鬼！」
【……】
「なぜ……ベルカさんばかりをつけ狙う。答えろよ！」
――いくら問いただしても……答えない。それどころか。
【ははは……答えないよ！　ほら！　殺したいんだろ？　殺しなよ……僕が憎くて仕方ないんだから……殺しなよ。殺せ！　殺せ！】
完全に開き直り、何を言っても笑うだけのピエロは、ただ一身に一つの言葉を繰り返した――殺せ。
今まで自身が奪ってきた全ての命に償おうというのか。嫌、違う。狂気に支配され生きてきた喜劇の主人公が、そんな易々と死を覚悟するはずがない。コールが内心自問自答する形で思考を巡らせていると。ピエロはその表情を下から見据えながら更に続けた【腰ぬけが……撃てば良いのに……これでまた、始めから……。】意味の分からない言葉だった。不気味に笑い。コールが意味を問いただそうとしたが、ピエロは、やはり易々と死ぬ気は、無かったようで。
一瞬の出来事だった。
「コール！」
マリーの叫び声と共にボロボロのスーツの襟足を引かれた瞬間。

とてつもない破裂音と共に窓ガラスを割って三つの薬莢が撃ち込まれた。部屋は瞬く間に白い煙に包まれ、それと同時に強い眠気と頭痛に襲われた。催涙弾が撃ち込まれたのだ。マリーはコールの腕にしがみついて、そのまま意識を失ったが。大人の身体には少し効きが弱いらしく、マリーの事を気にしつつもコールはピエロから目を逸らすまいとふらつく身体で目を凝らした。しかし……。もうそこにはピエロの姿は無く。目に映ったのは、三人の全く同じピエロと、抱えられるピエロが、不敵に笑っている顔だった。

「待て！　逃げるな……」

後を追おうと足に力を込めるも、催涙弾の効果で身体は次第にコントロールできなくなり、とうとう、自身も意識を失った。薄れていく意識の中で、一つだけ考えた事がある――あの声……まさか……。

※その後、駆け付けた捜査員達は壮絶な光景を見て絶句した。捜査員は全員気狂いピエロの捜査をしてきた仲間達だ。幾度となく同じ様に残酷な形で祀り上げられた死体を見てきた。しかしこれは、余りの異質さと、死体を包み込むかの様にして蔓延した血の臭いに嘔吐する者までいる程、まさしく惨劇の後だった。白い壁に吊し上げられた何とも残酷な遺体を見るなり悲鳴を上げる者。目を背ける者、怒りのあまり壁を殴る者。反応はどれも、苦しみが滲んでいた。捜査班達によって、ボロボロで埃塗れになった少女と青年は発見され保護された。まるで死体に見守られているかの様に床に倒れていた二人は、なんとも苦しそうな顔をして、マリーに至っては酷く呻いていた。思わず、一人が呟く

「この子、一生背負って行くんだろうな……この日の事。まだこんなに小さいのに」

「おい！　やめろ……思っていても口には出すな。辛いだけだろう」

「あ……すまん」

惨劇から二日後。
二人の眠る病室に入室する許可が下りた。真っ先に駆け込んだのは、目を腫らし、声を嗄らした、ボサボサ頭の女。ベルカだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4414y/

気狂いピエロ

2011年11月28日00時46分発行